

昭和二十年の夏

八月六日の広島原爆忌、六十六回目の今年も材木座の休日夜間診療所の当直の日であった。

医学生の頃はかなり関心もあつて、兵庫県境から広島県境まで二日かかりの平和行進に同行したり、広島市の原水禁世界大会に参加した年もあつたが、ノド元過ぎればで、忘れていくことも多く、近年はニュースで定番になっている原爆ドームと灯籠流しの映像を見て、あ、今年も、と思うだけでやり過ぎすことが多かつた。

六日の夜、自宅に居たら多分見なかつたであろうテレビの特集番組を、夜間診療所の診察室で欠伸を噛み殺しながら見始めたが、元軍人の興味深い証言にすっかり惹きこまれてしまった。

六十年も繰り返せば毎年の回顧番組にも新味はあるまいと初めタカを括っていたけれど、どうしてどうして今年のNHKスペシャルは力作であつた。メディアで終戦秘話の類が報道されるようになってから半世紀にもなるであろうに、今まで知る人ぞ知るでしかかなかつた六十六年前の事実が、今まさにその当事者によつて語られる、しかも語る人の年齢から察するにこれが最後の証言であろうと思われ、そのことにも感動した。

私には初耳の新事実ばかりであったし、それを語る齡の老兵士達のお顔がとてもよかった。

意外なことに敗戦まぎわの日本の防空監視哨は、中小の都市を片端から爆撃していた米空軍の動きを、交錯する電波からほぼ的確に掴んでいて、大編成のサイパン、グアムのB 29の群れとは別に、昭和二十年初夏からはテナン島にもB 29の小集団が出現したことも判っていたという。

この六〇〇番台の番号で呼び合うB 29の群が原爆投下の特殊訓練を繰り返していた部隊であったことを、広島を攻撃したエノーラ・ゲイ号の乗務員で唯独り生存している元米空軍兵士が証言している。八月六日、広島に「新型爆弾」を投下した一機が、サイパンではなくテナンから単独で飛来したB 29であったこと、またその三日後の八月九日、同じグループの別の一機が単独で豊後水道から北九州に侵入し、小倉上空で反転して南下しつつあることを、市ヶ谷の電波探知班は早朝から知っていた。

しかもこの朝テナンを発進して来たこのB 29が、その行動から二発目の「新型爆弾」を搭載していると推定していた。

電波探知班の陸軍将校は既に亡くなっているが、この情報を大本

営に届けた部下のひとりが現存していて、明確に証言している。

長崎に「新型爆弾」が投下される午前十一時よりも、五時間前
のことである。この時刻、大本営では戦争の帰趨を決める御前会議
の最中であつた。原子爆弾という言葉がもう使われていたのかどう
かは知らないが、その席での陸軍参謀総長の発言として、

「原子爆弾の威力は凄まじいというが、いくら米英でもそんなに何
発も作れないだろう」というのが残っているという。

長崎の大村基地には九州防衛を任務とする戦闘機部隊が温存され
ていたのに、大本営では九州上空の一機は問題にもされなかったの
か、その日迎撃命令は出されていない。戦争末期、日本の空は米軍
機の思うがまま、中小の都市への空襲は数日前のビラによる予告
付きという惨憺たる有様であつたから、単機で高空を飛ぶ偵察機ら
しいB 29は既に珍しくもなく、テニアン発進のB 29一機がいかに危
険であるかの認識は、残念ながら電波探知班だけに留まつた。

大村基地で終戦を迎えた八十八歳の戦闘機乗りの元航空兵は、
「紫電改は一万米の高空を飛ぶB 29を落すことの出来る戦闘機だつ
た、あの日何故命令が出なかつたのか」と訝る。この人の操縦する

飛行機は六日たまたま兵庫から九州へ飛んでいて、原爆投下直後の広島上空で爆風に煽られ、辛うじて立ち直って見下ろした市街には先刻まであった何もかもが一切無くなったように見えたと言っている。

敗戦前後の出来事については、その後編まれた多くの記録で大抵のことは知っていると思っていだけれど、キノコ雲の吹き上がった広島上空に日本の戦闘機が飛んでいたことや、遙かマリアナ海域の米空軍の動向を掌握する電波技術を日本陸軍が持っていたことなどは知らなかった。昭和十七年四月の京浜、名古屋への初空襲から始まった米軍の焦土作戦の目標は、十九年十一月のマリアナ基地群の完成以後、大都市から広く全土の中小都市の全てに拡大されて、日本の空の全てが無防備になっていた。二十年の春以後は毎日のようにどこかの市街地が襲われていて、日本がポツダム宣言を受諾して正式に手を挙げた八月十五日のまさにその当日にも秋田、伊勢崎、高崎、熊谷、小田原の五都市が空襲され、死者三七六人、焼失家屋六、四七九戸の損害を出している。

国力を比較すれば日本がアメリカとの戦争に勝つ可能性は初めか

ら無い。日本が犠牲を最小にとどめて開戦の過ちを正すには、緒戦の戦果をテコにして早期に講和を結ぶのが最善であったろうが、ミッドウェイの敗北以後その機会は無かった。

歴史にタラレバを持ち込んでも意味はないが、昭和の戦争指導者たちは一貫して自分たちに都合の良い情報にこだわり、不都合な情報を軽視する悪弊に陥っていたことは否めない。

彼ら在必敗の戦争を何故始めなければならなかったのかは、どう考えても判らない。いったい戦争をしたかったのは誰なのだ。

負けいくさをいかに早く収束させて犠牲を最小限に止めるかを構想出来なかった日本人の無能と、終戦を早めて自国軍隊の犠牲を少なくする為には、広島長崎の市民の惨苦は必要なことだったという米国人の傲慢も、許せない。

それにしても二発目の投下目標であった小倉が視界不良のために長崎に向かいつつあったB29こそは、絶対に撃墜すべき標的であったこと、しかもそのための機会の十分にあつたことを、今回初めて知らされた時の老戦闘機乗りの表情が忘れられない。

(神庫 二〇一二年三月)